

文藝雑誌『こをろ』と校友会誌『若樹』

——「精神的、文化的気圏」を生成する「少女」たち②——

大 國 眞 希

一枚の写真を紹介するところから本稿を始めたい（写真①）。一九九三年一〇月一九日付『読売新聞』（一六面）に「矢山哲治をしのんで」「没後五〇年」「こをろ」同人会開く」との見出しと共に掲載された写真で、「こをろ」同人会（前列から三人目一丸章、中列左から三人目眞鍋呉夫、後列右から二人目星加輝光）」と説明が付されている。以下に記事から少し引用する。

かつて、『文学的戦士』とでもいうべき若き戦中派の文学者で創刊した同人雑誌「こをろ」で異彩を放った矢山哲治がナゾの死を遂げて五十年。その矢山の追悼と鎮魂の意味を込めて、このほど唐津市の水野旅館で、東京からも『大物』がそろって西下、ひそやかに「こをろ」同人会を開いた。

これにはさきに句集「雪女」（沖積舎）で読売文学賞を受賞した眞鍋呉夫や、文壇のパーティーばやりの中で「断然欠席」（講談社文庫）を出して反響を呼んでいる阿川弘之、それに那珂太郎、鳥井平一、富士本啓示、吉岡達一、中村健次、それに地元から一丸章、星加輝光らがはせ参じた。このおぜん立てをしたのは、「こをろ」をかげで支援した山崎邦栄ら女性群であった。

この「こをろ」をかげで支援した」とされている女性たちは当時「グループ」と呼ばれており、山崎邦栄など県立福岡女学校同窓生とともに、山崎邦栄の妹・山崎邦歌などの福岡女学院の人たちによって形成されていた。新聞に掲載された件の写真にもその「女性群」の姿を確認することができる（前列の左端に山崎邦栄、山崎邦歌は中列の左端）<sup>(1)</sup>。

『こをろ』は、一九三九（昭和一四）年一〇月に福岡で刊行され、一九四四（昭和一九）年四月発行の一四号をもって閉じる、二〇代の学生を中心に発行された文藝同人誌だ。刊行において中心的な役割を果たした矢山哲治自身、「私達の貧しい（ほんとに！）、まだ、俗にいふ、海のものとも山のものとも判らない者達によってつくられた、まだ雑多な内容の雑誌」と評している<sup>(2)</sup>。同人雑誌が統廃合されゆくなか、中心人物であった矢山哲治が白玉楼中の人となり、闘病中・待機帰還中と女性を除いて全ての同人が軍務についたと編集後記に書かれるに至るまで（正味五年間）刊行し続けられた。その背後には阿川弘之が「彼女らは雑誌発行の支援グループ、準同人の外郭団体兼遊び仲間のような立場」と称した<sup>(3)</sup>、『こをろ』の書き手としては）表に現れない女性たちの存在がある。

「こをろ」を立ち上げる直前の一九三九（昭和十四）年八月一日、男女グループは寿司やキャラメルなど持参して、男女に分れて新博多駅に集合。出発後に合流して、名島の海岸を走りまわって遊んだ」彼ら／彼女らは「記録にあるだけでも、一九四〇年（昭和十五）年に背振山方面へ遠足。七月には「こをろ」第四号の原稿をもって来福した



【写真1】

「こをろ」同人会の際の写真（個人蔵）

阿川弘之を歓迎して、油山へピクニック。十一月には英彦山へハイキング。翌年には油山（七月）、筑紫耶馬溪（八月）、立花山（十一月）とグループ交際は続けられた」と杉山武子氏が紹介する<sup>（4）</sup>ように、戦時下に自然の中で「美しかった日」を共に過ごしたことが明らかになっている。先に「書き手としては表に現れない」と書いたが、しかし、福岡女学院（当時は福岡女学校。以下、本稿では便宜的に福岡女学院と統一して記す）に在籍中、彼女たちもまた伸びやかな表現者であったことを強調しておきたい。

福岡女学院にはいわゆる校友会の雑誌『若樹』が存在する。もともと新聞型の『福岡女学校青年会誌』が刊行されており、一九三四年にその作品号の誌名が募集され、詩篇一二八章三節（「汝の子輩は汝の筵に円居して橄欖の若樹の如し」）からとった名が採用され、年に一回刊行される運びとなった<sup>（5）</sup>。戦時下に休刊の期間を挟み<sup>（6）</sup>、一九四七年、校舎の戦災復興記念誌として新聞型の『若樹』が刊行されたことを契機に、翌一九四八年に刊行したものを復刊三号と銘打ち、継続の道が開かれた。

先に「伸びやかな表現者であった」と書いた証左として、この『若樹』に、後に『こをろ』を支援した女性として名を報じられた山崎邦歌、田中幸代、井上ミユキがそれぞれエッセイと詩を寄せている。

まずは、創立五〇周年のお祝いに多くの紙面を費やしている三号に掲載された山崎邦歌（誌面では、くにか）と井上ミユキの詩を引用する。

### 「雨上り」（山崎くにか）

郊外の散歩道

犬の足跡の様な水たまり

あ、  
ほのかに青空が――

まあ何と

朗らかに晴渡つた梅雨の日  
私の心も

開きゆく花の様に――

(『若樹』三号、一九三五年)

「制服」(井上ミユキ)

新しく着た制服

何だか急に

御姉様の様よ

なぜつて?

でも

厳粛な

清い

記念式に加はる

一人なんですもの

（『若樹』三号、一九三五年）

次に、表紙には「昭和十一年 福岡女学校青年会 わか樹 第四号」とあるが、奥付は昭和一〇年発行となっている（平地次郎よれば昭和一一（一九三五）年に配布された）『若樹』に掲載された田中幸代、山崎邦歌のエッセイを引用する。

### 「夏の雲」（田中幸代）

夏の雲!! 私は、夏の雲が大好きだ、

コバルトのすみ渡つた大空の中にくつきりと浮かび出る夏の雲!!

春の雲は美しいには美しい、けれど何だかぼつとかすんだ様な雲、私は嫌ひだ。

冬の雲は陰気臭い。

そして夏の雲は若々しい、元氣にあふれる様な……コバルト色の大空とはいへコントラストだ。

ロマンチックな人は「夏の雲の中に、若い王子様の居る城があつて云々」なんて事を考へてあこがれてるかも知らんけれど私はそんなに考へない。

あの雲に乗つて大空を自由自在にかけ廻りたいと思ふ。どんなに痛快だらう、下界を見下して全く飛行機に乗つた時よりいゝ氣持がするだらう（と言っても飛行機に乗つた事はないが）。

今日も若杉の後の方より、例の雲が出て来た。全く画の様だ。私は、あの雲を見てゐる時には氣持

まではつきりと元氣一杯になる。

どんなに景色を見るよりも、夏の雲を見る方が、私の性格に合つてゐる様だ。今、もしこゝに魔法の神様がゐて、なんでも願をかなへてやるとおつしやつたら。

「夏の雲に乗つて、世界漫遊をしたい」

とそくざに答へるだらう。

誰か夏の雲に乗れる世界的発明をしてくれたら、私は、その人をノーベル賞の授賞者に推薦してやりたいなんて馬鹿げた事を考へてゐる。

夏の雲!! いつまでも、あの若杉山の後方から英姿をあらはしてくれ。

(『若樹』四号、一九三五年)

### 「自然」(山崎邦歌)

自然!! 実に素晴らしい言葉、あきない言葉であらう。

自然は大きくそしてどこまでも美しく清らかなものだ。

自然の力にも感謝しなければならぬ。

私は夏休みに阿蘇に登つた。

八丁程のだら／＼坂を登りつめて得たものは圧迫される様な自然の力ばかり。

もう／＼と白煙をたなびかせて地の底からのうめき声は偉大な自然の力だ。

あい。

その自然の前にある私達の何と小さき事よ。

此の人間を何と思つて居るのであらう！ 毎日毎日がおそろしく変化して行くこの火山。

私は此の小さな頭で人間と自然とをみくらべながら、此の大自然の空氣を吸つて居た。

現実も夢も一時に飛んで了つたならば後に残るのは唯静止した自然許りである。

私達も静かに自然の中で だん／＼と成長して 行くのである。

常に自然に親しみ自然に慰められなければならない。

そうして、この偉大な自然を時には遠く、時には近く見出し尊敬の精神を持つて生活して行かう。

自然よ。

いつまでもそのまゝの姿で居てみたいものだ。そして私達の生活をお前の為に清らかにして欲しいものだ。

（『若樹』四号、一九三五年）

阿川弘之が「こをろ」に初めて参加した時、吉岡達一に「あした油山というところでピクニックを兼ねた同人たちの集りがある。その時中心人物の矢山哲治をはじめ皆に紹介する」と言われたと回想し（⑦）、「こをろ」の同人や「グルッペ」とちと福岡市近郊の山で時間を過ごしたことは先に述べたとおりだが、『若樹』掲載の田中幸代や山崎邦歌の自然を詠んだ文章から、そう遠くない未来に自然の中で過ごした大切な時間の下地に触れられる心地がする。のちに「グルッペ」と過ごした体験をもとに吉岡達一は「友達」⑧を書き、眞鍋呉夫は「二十歳の周囲」や「美しい日」⑨と題した小説を執筆した。「グルッペ」と呼ばれた女性たちは『こをろ』を支援する前から、書くことと読むことを愛し、みずから表現する「少女」たちであった。その姿の一端を『若樹』は伝えている。

福岡女学院では、伝統的な音楽教育に加え、一九二六年に田中冬心を図画の教員として迎えてから、科目を越えた総合的なカリキュラムを導入し、創造性を育む環境を整えていた。田中冬心は一九四一年に制定された福岡女学院の校章のデザインも手掛けており、一九五八年に永眠する直前まで三〇年以上在職し、『福岡女学院七十五年史』（一九六一年）には「学院独特の個性教育の開拓のために」活躍し、その功績は大きいと記録されている。創立七〇周年記念式では永年勤続者（現職員）として表彰された者の名簿に名を連ねている<sup>(10)</sup>。

田中冬心を起点とした福岡女学院の総合的なカリキュラムについては別稿に譲る<sup>(11)</sup>こととして、本稿は当時の教育の様子を伝える卒業生（昭和二三年卒業）の談話を紹介しておきたい<sup>(12)</sup>。『若樹』が復刊された際に題字部分に木のデザインを描いた渋谷敏子氏は「福岡女学院と私 勤労奉仕の日々と戦後の教育」についての談話を残していて、冬心については、「画の田中冬心先生のお嬢様も卒業生で一時国語の先生をされていたと聞きました。冬心先生にはずっと習いましたが、既成概念にとらわれず、自分の感覚で見る様にと云う事を教えられたと思います」と語っている。そして、「色々な先生に出会い、それぞれの思い出がありますが、山下先生（引用者注 当時の高崎節子の姓）は何度も受け持ちになった故か、一番よく覚えています」と述べ、特に印象に残っている教員として名を挙げられている高崎節子は、一九四二年から一九四八年まで福岡女学院に勤務し、そのうち「子どもや女性の人権尊重と福祉の充実を訴えて奔走」<sup>(13)</sup>する官僚となった。女学院に勤務する前には「支那との境」〔『女人藝術』一九三一・八〕、「山峡」〔『婦人公論』一九三九・七〕などの小説を世に問うてもいた。「山峡」は懸賞短篇入選作として掲載された（選者は川端康成）。官僚の道を進んだのちも、公務の傍ら小説を書き続け、最晩年に病を得て入院したときにも小説の構想を温めていた<sup>(14)</sup>。先の渋谷敏子氏の回想では「何年か前の婦人公論と云う雑誌で懸賞募集した小説に入選されて、その作品と作者の写真が載っている号を、母がたまたま買っていて、私も小学生で分からない乍らも、文字だけを追って読んでいたので、その方と分かって、びっくりしましたが、そんな事はこちらからは云ひませんでし



た」と述べているので、高崎節子が小説を書いて発表していたことは生徒の間でも知られていたようだ。杉浦春子の「女の一生」を学校の焼け残った体育館で催し、「杉浦さんを囲む会」という座談会が開かれたことや、前進座の「ヴェニスの人」や、「キュリー夫人」「我が谷は緑なりき」などの映画を全校生徒で見た思い出と共に、次のようにも回想している。

国語の先生でしたが、若いうちは広く浅くで良いから色々な事に興味をもって、首をつつこんで見なさい。生いきと云われても頭でつかちでもよいから、自分の眼で見たり、聞いたりする事が大事ですと云われました。九大教授の講演や、疎開中の芸術家の集まりの会、絵の展覧会（赤星孝さん山田栄二さん等）にも連れて行つて頂きました。

ここからも福岡女学院に流れている芸術にまつわる教育環境をかいまみることができる。水口一志によると高崎節子は一九六四年に法務省・東京婦人補導院へ異動となったときにも「収容されている女性に対し情操教育の一環として、東京石橋美術館所蔵のルノアール、モネなどの名画や、自ら詩作した作品を院内に展示した」という<sup>(15)</sup>。本稿では、文藝雑誌『こをろ』のかげの支援者として取りあげられる女性たちがみずから表現者であったことを、その生き生きとした姿の一端を校友会誌『若樹』を繙くことで示した。一人ひとりを大切に、表現者となりうる個を育む福岡女学院の教育を芸術的な側面に焦点をあてて、今後、更に論じていくことを今後の課題として本稿を擱筆することとする。

① 「グルッペ」については「精神的、文化的気圏」を生成する「少女たち」として、その文化の一端を福岡女学院の生徒たちがつくった「ぬもん帖」を紹介することによって触れたことがある（拙稿「文藝雑誌『こをろ』のグルッペ」『精神的、文化的気圏』を生成する「少女」たち」（福岡女学院大学人文学部篇）二九号、二〇一九・三）。一九四三年に福岡女学院の生徒たちによって制作された慰問帖は、現在は福岡女学院資料室が保管している。その経緯については丹村智子「女学生の慰問帳戻る」（西日本新聞二〇一九・八・一六）などに詳しい。

② 矢山哲治「私信―こをろを読んで下さる方に」（『こをろ』六号、一九四一・三）二九頁。

③ 阿川弘之「私の履歴書⑦」（『日本経済新聞』一九八七・一二・一―三二）のち安岡章太郎・阿川弘之・庄野潤三・遠藤周作『第三の新人…私の履歴書』（日本経済新聞社、二〇〇七）。「吉岡（引用者注 吉岡達一）から突然の手紙で、今度福高や長崎高商、九州大学在学中の若い仲間が同人雑誌を出す、君も参加しないか、そちらの文芸部誌に載った君の作品は読んでい」と言ってきた。その気になり、休日を利用して博多へ出かけて行った。迎えてくれた吉岡達一が、あした油山というところでピクニックを兼ねた同人たちの集りがある、その時中心人物の矢山哲治をはじめ皆に紹介すると言った。」と書かれている一七一―一七二頁。

④ 杉山武子「矢山哲治と「こをろ」の時代」（續文社出版、二〇一〇）。「男性グループの中心には矢山がおり、女性グループは山崎邦栄がリーダーシップを取り、自分の通う女学校や、妹の通う福岡女学院の友だちを誘った。彼女たちは「こをろ」が創刊されるとたちまち院外団となり、「こをろ」親衛隊として読者となり、同人たちとのグループ交際を楽しんだ」「こをろ」創刊時に三十数名の同人を集めた矢山は、さらにそのまわりにグルッペと呼ばれた女学生集団の「こをろ」親衛隊をも集めたことになる」とも書かれている。一〇二頁―一〇四頁。

⑤ 武田政子「若樹のおいたち」（『若樹』復刊一〇号、一九五六・二）には、生徒・卒業生を対象とした機関誌としてあった「福岡女学校女子青年会誌」に加えて「作品号」という要望が強くなってきたのに応えて『若樹』が刊行されたと回想している。『若樹』の第一号は一九三三（昭八）年。「以来、年二回の新聞型の青年会誌と年二回の若樹の発行は年々継承され、次第に成

長もりましたが、戦争が激しくなるにつれ、印刷も不自由になり、若樹どころか一枚の青年会誌も見られなくなりました。／さて戦争が終つて後、昭和二十二年の冬のこと、当時の校友会（生徒会の前身）の幹部の人たちから、講堂の落成記念に若樹復刊を計画しようと言われた時、私はいささか驚きました。穴のあいたブラックの教室で、ノートさえ不自由にしている時に、一銭の予算もなく……と思ったのです。所が皆の決意は意外に固く、全校に呼びかけて一部五円の予約を取り、薄い紙を工面して、とうとう新聞型頁の復刊第一号ができました。当時堅柏にあつた印刷所に、雨にぬれながら、日に二度三度校正刷りを持つて往復した人たちの顔が、ありありと浮かんで来ます。若樹復刊は卒業生にも喜ばれ、残部を大分買ってくれて、第二号の基金が四百円ばかりできたのを覚えています。第三号からは予算も計上され、雑誌の形にもなりました。その後の若樹は単に作品号ではなく、学校生活の全的な陶冶の舞台として、新しい芽をすくすくと伸ばしています。最初に一粒の種をまいた卒業生たちは今どうしているでしょう」（三八頁）と、休刊から復刊へのいきさつ、在校生や卒業生に大切に育まれた状況を描き出している。

⑥『若樹』復刊三号（九四八年）五五頁。武田政子署名記事。「始めは漸う五十頁足らずの僅かに本の形をしているだけのものでしたが、だん／＼号を重ねる毎に、作品も豊富になり、カットも表紙も面白くなり、この学校独特の編集の見られる様になつた所で、あの非常時の騒ぎに遭い、自然中止になりました。／それから激しい時勢を経て、昨年の十二月、またまた若樹が生まれました。焼跡に建てられた新校舎に再び若樹が芽生えて来ました。乏しい資材の関係で、一号、二号は新聞型ですませましたが、三号目がやつと雑誌になりました。が然し、四号五号六号七号……次々に伸びて行く姿がもう目の前に浮かんで来ます。」と続く。また、武田政子は、昭和一〇年に刊行（平池次郎によると昭和十一年に配布）された『若樹』の編集兼発行人。平池次郎「福岡女学校青年会誌の回顧」（前出）にも一九三〇（昭和五）年九月二五日発行会誌から、『若樹』（昭和九年三月二日発行）と名を改め、昭和一四年二月二〇日発行『若樹』七号を最後に休刊、一九四七（昭和二二）年に校舎の戦災復興記念会誌を経て、一九四八（昭和二三）年に「復刊第三号」として刊行に至るまでの変遷と内容が記されている。

⑦（3）に同じ

⑧ 吉岡達一「友達」（『こをろ』一一号、一九四二）

(9) 共に眞鍋呉夫『二十歳の周囲』(一九四九、全国書房)に所収。

(10) 『福岡女学院七十五年史』(一九六一年)一一七頁。その他、院長の徳永ヨシ(二三年)、教諭平地次郎(二五年)、藤川栄(一九年)も記載され、この時、表彰された現職員のなかでは田中冬心(二八年)が最長である。

(11) 拙稿「福岡女学院の芸術教育―田中冬心・貝島福路を中心に―」(『福岡女学院比較文化紀要』(二二号、二〇二五・三)も参照された。

(12) 福岡女学院同窓会関東支部 二〇一四年三月開催「談話室ぶどう」原稿「福岡女学院と私 勤労奉仕の日々と戦後の教育」洪谷敏子(昭和二十三年福岡女学校卒)

(13) 「女性、児童福祉の先覚者に光 福岡・遠賀町出身の官僚 高崎節子さん 終戦後の混乱期に奔走 小説で社会問題告発も」(『西日本新聞』二〇一九・二・一三、朝刊 一三面)。高崎節子と福岡女学院については、拙稿「高崎節子と福岡女学校」(『福岡女学院大学紀要人文学部篇』三三三号、二〇二三・三)も参照されたい。

(14) 高崎節子女史三周忌記念出版実行委員会編集・発行『むらさき』(一九七六・九)

(15) 「力のない者のためにパンドラの箱を開けた官僚 高崎節子」(『広報おんが』一一六〇号 二〇一八・八・一〇)七頁。

# 【付記】

\* 『若樹』の資料、渋谷敏子氏の談話(福岡女学院資料室所蔵)につきましては福岡女学院資料室にご教示いただきました。

また、『若樹』の資料につきましては福岡女学院図書室にもお世話になりました。『こをろ』関連につきましては、北海道大学大学院の田中英資教授にご教示いただきました。記して御礼申し上げます。

\* 現在では配慮が必要な表現がありますが、当時の資料から抜粋したものなど、一部そのまま掲載しています。